

新・向山洋一 実物資料集

第10巻

全国10万人以上の教師が熱狂した
教育技術法則化運動の誕生

サンプル版

ver.20210913

※本ファイルはサンプル版です、実際刊行されるものと内容・仕様等が異なる場合がありますことを予めご了承ください。

※図版等の解像度は、インターネットを通じた画面表示に最適化した低解像度のものです。
実際の印刷物は高解像度の図版を使用して印刷いたします。

新・向山洋一実物資料集 第10巻 目次

はじめに 向山洋一 1

解 説 40年近く前の法則化運動から今、何を学び、生かしていくのか 谷 和樹..... 6

1. 原文発見！ 教育技術法則化運動は向山洋一によってこのように生み出された 7

（1）第1次案 1984.5.9 8

（2）第2次案 1984.5.13 10

（3）第3次案 1985.6 12

（4）教育技術法則化のよびかけ 雑誌掲載 14

（5）教育技術法則化運動は自分にとって何か 根本正雄 16

（6）教育技術法則化運動は私にとって何か 石岡房子 1984.9.24 20

解説コラム1 「教育技術法則化運動」誕生に私たちは何を学ぶのか 28

（7）応募論文 No. 1～2 第Ⅰ期・第Ⅱ期応募数ベスト10 30

（8）応募論文 No. 3～4 第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期応募数ベスト10 34

（9）応募論文 No. 5～12 第Ⅰ期～第Ⅳ期応募数ベスト20ほか 38

解説コラム2 「名前を掲載する」「数値で示す」からこそ運動は拡散する 56

2. 同時進行のドキュメント ～向山洋一は法則化運動をどのように燃え上がらせたのか～ 57

（1）No. 3 法則化運動成功のたった一つの条件 1984.7.21 58

（2）No. 4 第Ⅰ期応募論文状況 1984.8.1 62

解説コラム3 「失敗すれば終わり」から見える企画の作り方 66

（3）No. 5 第Ⅱ期論文と手紙の紹介 1984.8.7 67

（4）No. 6 法則化運動の主体者はどの教師か 1984.8.8..... 69

解説コラム4 「立ち上げ」の重要性和その後の「ネットワーク化」論 73

（5）No. 7 法則化運動発足から5年の見通し 1984.8.9 74

（6）No. 8 法則化運動を進めていく上での用語の問題点 1984.8.10 78

解説コラム5 運動の継続と拡大のために必要な条件 82

（7）No. 9 法則化運動の戦術的な問題 1984.8.10 83

（8）No.10 全国からの手紙の紹介 主体者層の確立を 1984.8.15 85

（9）No.11 法則化運動の主体者である私たちは何をしたらいいのか 1984.8.15 87

解説コラム6 「主体的に運動・企画に参画する」メンバーを育てる 89

（10）No.12 ベテランの先生の批判に対する向山の意見 1984.8.16 90

（11）No.13 法則化運動成功の確信 1984.8.20 92

解説コラム7 何かを主張するとは「現存する何かを否定する」ことである 98

（12）No.16 応募論文の検討合同合宿の様子 1984.8.31 99

（13）No.17 応募論文への向山の感想 1984.8.31 101

（14）No.18 山口県横田論文の感想 1984.8.31 103

解説コラム8 第1回合宿で「すべてのフォーマット」が規定された 105

（15）No.19 合宿後の運動の展望 1984.8.31 106

（16）No.25 組織はなぜ生まれるのか？そして、どうやって消滅するのか 1984.9.15... 108

（17）No.26 法則化の方法「指示…発問」の明示 1984.9.14 110

解説コラム9 「限定的」であるからこそ全力投球できるロマンがある 112

（18）No.27 向山の社会科授業への代案 1984.9.15 113

（19）No.28 ～29 合宿参加の感想 1984.9.16 115

（20）No.30 様々な便り 1984.9.21 119

解説コラム10 人を集めて事をなす 121

（21）No.31 「追試」「実践」こそが運動の生命線 1984.9.21 122

（22）No.34 ～39 杉山裕之氏の手稿とそのコメント 1984.9..... 124

解説コラム11 論戦の根拠を「追試」と「子どもの事実」とする 136

（23）No.43 賛成した人が自分でできることをやる 1984.9.23 138

（24）No.44 法則化運動の骨格「1. 追試 2. 多様性 3. 実践性」 1984.9.23 140

（25）応募論文の書き方 142

（26）No.45 ～47 石岡氏の実像 1984.9.27～28..... 148

（27）No.48 法則化運動の中心は若い教師たち 1984.9.29 154

（28）No.49 新たな上達の方法 1984.9.29 156

解説コラム12 「既存概念」を否定し「ポイントを絞る」からこそ拡大する 158

（29）No.50 若い教師へ なぜ向山の主張は受け入れられるのか 1984.9～10..... 159

（30）No.63 ～64 この授業はどこがダメなのか 1984.10.22..... 161

解説コラム13 私たちへの3つのメッセージ 165

（31）No.68 ～69 第二期へ向けての運動全体のイメージ＆イメージ図 1985.2.14 166

解説コラム14 拡大する法則化運動をさらに大きく組織する 170

3. 『教室ツーウェイ』を企画する ～向山洋一がたどったツーウェイ誕生までの軌跡～ 171

（1）「教育雑誌の構想を考えています」 1985..... 172

（2）ツーウェイ 呼びかけの構想 1985..... 176

（3）募集 東京ツーウェイ 1985..... 178

（4）ツーウェイ第二次企画案 1985.5.19 180

解説コラム 15 モンスター教育雑誌『教室ツーウェイ』の設計	182
4. 燎原 ^{りょうげん} の火の如く！ 教育技術法則化運動を全国展開する向山洋一のリーダーシップ	183
（1）NO.101 新潟公開合宿、東京 20 代合宿 1985.6.20	184
（2）NO.103 新しいスター 新しい教材を模索する 1985.6.20	186
（3）No.104 法則化の方針 1985.6.20	188
（4）No.106『授業の腕を上げる法則』を広める 1985.7.18	190
（5）No.107 心通じる仲間とは楽しく素晴らしく 1985.7.18	192
解説コラム 16 夢を描く 次々に運動を投入する 楽しさを演出する	194
（6）法則化運動の組織論 1985.9.25	195
（7）法則化中央事務局 心得 1987.7.9	201
（8）新漢字習得システム	203
（9）向山メモ	205
解説コラム 17 乱世には乱世の文法がある	206
（10）中央企画室「組織にとって衰退の分岐点は何か」 1987.12.9	207
（11）法則化運動 1988 今後 3 カ年計画達成イメージ 1988.1.7	213
解説コラム 18 リーダーの「イメージ」と「推進力」に組織は規定される	217
（12）法則化運動中央企画室 当事者意識のあるスターづくり 1988.1.7	218
（13）中央事務局 漢字習得システム参入 1988.1.14	220
（14）法則化運動 7 つの視点 1988.4.8	222
（15）人材発掘のための一覧表 1988.4.23	224
解説コラム 19 「企画」と「人材の発掘」に注力する	226
あとがき なぜ 10 万人以上の教師が「教育技術法則化運動」に熱中したのか 小嶋悠紀	227

40 年近く前の法則化運動から今、何を学び、生かしていくのか

谷 和樹

1984年、向山氏は教育技術法則化運動を立ち上げた。氏が40歳になる年であった。

雑誌に掲載する呼びかけ文を構想したのが6月。その2か月後の8月には944本の論文が集まっている。その論文タイトルのすべてを向山氏が手書きで集約している。（パソコンもワープロも全く普及していない時代である。）

この運動をすすめていく主体者は30歳をピークとした青年教師であると向山氏は予想している。当時としては誰も思いつけないことであった。

10月までに60枚以上の「教育技術法則化運動」の通信を書き続けている。これを全国の教師たちに手紙で送っていたのである。

翌1985年には、雑誌『教室ツーウェイ』（明治図書）の企画がはじまり、1986年に創刊。法則化の中央事務局も組織化されていく。

そんな1986年。

向山氏が立ち上げたこの運動が、まさに文字どおり燎原^{りょうげん}の火のごとく広がっていき^{ただなか}只中で、私は教師になった。

私と同年代付近の人で、現在管理職になっている人や教育委員会・文部科学省等の主だった方々で、この運動を知らない人、向山洋一氏の本を読んでいないという人は、まずいないだろう。

「運動の形として大変ナウい、ユニークなもの」

「運動の組織は、大変にソフトなもの」

「疲れたらサボればいい」

「おかしいと思ったら『反対』すればいい」

本資料に登場するこうした氏の書きぶりに、今、実感をもって心から学んでいるのが、既に57歳になった私である。

今、令和の時代はさらに大きなターニングポイントを迎えようとしている。この記録から学べることの価値は非常に高い。

1. 原文発見！ 教育技術法則化運動は向山洋一によってこのように生み出された

テーマの例	①「立」という漢字の指導	②後の足は何色のS教えるかい
	③水にうかせる方法	④個人新聞の方法
	⑤ハーモニカや一踏の指導	⑥かけ算九九の活用方法
	⑦集合した時の並びせか	⑧「アリ」を教える
	⑨「かさこじぞう」の5つの発向	⑩学級文庫係りの指導
	⑪学級経営案の形式、記入例	⑫3分間のお話
3 審査	基準 ①他の教師に役立つもの（主基準）	
	②文章が読みやすいもの（副基準）	
発表①佳作	誌上でテーマ・伝承を発表 ^{します}	
②入選	誌上に論文を掲載 ^{します}	
③入賞	誌上に論文を掲載し、「教育技術法則化シリーズ」の序章で発表 ^{します}	

第1次案 1984.5.9. 向山

教育技術法則化のよびかけ 投稿論文のよびかけ

「跳びはこは誰でも跳ばせられる」という向山式跳び箱指導法は、全国に広がり、今まで跳べなかった子が、何千名と跳べるようになりました。

このような技術は、全国各地にたくさんあると思えます。そういう技術を開発し広め、教師の共有財産にしていくために、本企画を考えました。

ぜひ、ご協力いただきますようよびかけるとです。

1. 目的 投稿論文を広く募ること、教育技術の共有財産化を図る。

2. 投稿論文

- | | |
|----|--|
| 時期 | 第1回×第2回 9月30日(遅着は第2回へあわす。) |
| 形式 | 原稿用紙400字詰6枚(図表と計量を入れる)(中編は省略) |
| 宛先 | 明治図書編集部 |
| 内容 | ①教育内容・教育技術に関するものは何でもよい
②他実践の紹介、追試、修正でもよい。(その旨を明記する)
③発表・未発表、個人・団体ともよい。(1人1つ応募してよい)。
④必ず、他の教師が真似できるもの。
⑤いくら狭いテーマでもよい。効果が1%でもよい。 |

例 ①漢字「立」の指導

②「かまこじぞう」導入の発向

③水にうかせる指導

④群読の指導

3. 審査 基準
- ① 他の教師に役立つもの
 - ② 効果が見えやすいもの
 - ③ 文が読みやすいもの

審査員 ① 宇佐美寛、向山洋一、江部満、樋口雅子

- 賞
- ① 佳作 1名の審査員が推薦するもの
 - ② 入選 2名の "
 - ③ 入賞 3名以上 "

4. 発表
- ① 佳作者は誌上に氏名・テーマを発表する
 - ② 入選者は誌上に「論文」を発表する
 - ③ 入賞者は誌上に「論文」を発表し、後日加筆して「教育技術の法則」シリーズに含める。
 - ④ 発表はすべて「教育技術の法則シリーズ」の巻末で行う。
5. 特典
- ① 佳作3回で明治図書雑誌編集長簿に登録
 - ② 佳作・入選(2回以上)5回で雑誌論文執筆
 - ③ 佳作・入選5回で、本シリーズ(中編)原稿用紙16枚応募資格を得る
 - ④ 入選・入賞(4回以上)8回で、共著、雑誌別冊の原稿依頼
 - ⑤ 入選・入賞(6回以上)10回で、連載、or 著書、or シンポジウム提案依頼
6. 添削 応募論文へのコメントを求められる。
著書(院史記入のこと)と500円分の切手を同封のこと。

投稿論文のページ

- | | | |
|--------------------------|--------|-------------|
| 1. 特選論文 (1本~3本) | } | 計20P |
| 2. 入選論文 (5本~10本) | | |
| 3. 佳作者氏名 | | 1P |
| 4. 今回の応募状況、総数、男女、地域、テーマ別 | | 1P |
| 5. 審査を終えて、研究論文の書き方 | 宇佐美寛 | 2P |
| 6. 実践記録の書き方 | 向山洋一 | 2P |
| 7. 次回の連絡 お知らせ | 編集長の意見 | 江部満、樋口雅子、2P |
| | | 1P |

キーワード 教育技術の法則化、共有財産化、実践家の発掘。

第2次案 1984.5.13. サークル等の意見をもとに修正しました。

あなたも書きませんか - 投稿論文のよびかけ -

「跳び箱は誰でも跳ばせられる」という向山式指導法は全国に広がり、ほんの数分の指導で何十名という子どもが跳べるようになりました。

「バスの運転手さんはどのように仕事をしていますか」という発問では子どもは動きませんが、「バスの運転手さんはどこを見てますか」という発問は子どもをゆさぶります。

このような技術は、全国各地にたくさんあると思えます。そうした技術を発掘し、法則化していくことは、より価値ある教育を築いていく上での大切なことです。また、法則化した技術を広め、修正し、教師の共有財産としていくことも大切です。

本企画は、埋もれた教育技術を開発し、法則化し、共有財産化していくために考えられたものです。ぜひ、一人でも多くの方々の投稿をよびかけるのです。また、「良い仕事をしているのに、書くのは苦手だ」という方もおられます。

そのため、「自分の実践を書く」ことのほかに、「私の知っている教師に、こんなよい実践をしている」という、紹介の論文でも良いことにしました。

「書くのは苦手だが、うまく書けるようになりたい」という方のために、添作を企画しました。また、「研究論文・実践記録の書き方」の講座も参考にすると、思います。この企画は、年4回募集の割でずっと続けます。

ぜひ、多くの投稿をお願いします。

1. 目的
 - ① 全国の埋もれた教育技術を開発する。
 - ② 教育技術を法則化する
 - ③ 法則化した教育技術を共有財産化する。

2. 投稿論文 3回締め切り、昭和59年9月30日(遅着は10月2日に締め切り)

形式 400字詰原稿用紙6枚以内(図表は計算に入れず)

あて先 中央区 明治図書出版部 編集課

住所氏名、年齢、勤務先をご記入下さい。

内容 ①教育技術・教育内容にかかわることなら何でもかまいません。

②他の教師の紹介、他の技術の修正、他の実践の追試でもけっこうです。
(その旨を明確に下さい)

③お一人でいくつ応募されてもけっこうです。発表・未発表を問いません。

④どれだけ狭いテーマでもけっこうです。今までの「ほんのちと効果がある」ということです。

テーマ例 ①漢字一字「立」の指導 ⑥絵の具は何色から教えるか

②入学式に何を教えるか ⑦さかあがり指導方法

③木にうかせる方法 ⑧新年度の指導

④ハーモニカの指導 ⑨かさこじょう導入の発問

⑤かけ算九九の展開方法 ⑩「雑草園」で何を教えたか

3. 審査 基準 ①技術・他の教師に役立つもの (主基準)

②文が読みやすいもの (添作後の再応募もできます)

審査員 中佐美寛、向山洋一、江部浩、樋口雅子

表彰 ①佳作 1名の審査員の推薦 ②入選 2名の審査員の推薦

③入賞 3名以上の審査員の推薦

発表はすべて『教育技術の法則化シリーズ』(仮)1期4冊)の巻末で行います。

4. 夢 入賞 (1名~3名)……誌上に応募論文を公表し、『教育技術の法則化シリーズ』に
めいめい、巻末を添作します。

研究員 明治図書雑誌(1種)1年分

入選 (5名~10名)……誌上に応募論文を公表し、巻末を添作します。

研究員 明治図書教育書2冊

佳作 (制限なし)……誌上にテーマ、氏名を公表します。

5. 特典 ① 佳作・入選 4回で雑誌論文発表の場を提供します。

② 佳作・入選 8回(但し入選5回以上)で雑誌別冊などの場を提供します。

③ 入選・入賞 10回で、著書、共著、特集の提案などの場を提供します。

④ 明治図書出版の公開研究会に優先的に参加できます。(1回でも佳作以上は) 応募論文に対するコメント程度の添作を希望できます。添作は、中稿(400字)

向山さんあたりです。返信用封筒と1000円分の切手を同封して下さい。
(添作) 添作後は再応募もできます。

→◇ 6枚では短いといふため16枚の中稿の応募も受けつけます。中稿の応募には資格が必要で、資格は、佳作・入選3回以上ということにします。